10 月 9 日のメッセージ

聖書：コロサイの信徒への手紙　1：　21 – 29

「揺るぐことなく」

何度、救いの約束を確認したところで、結局、揺らいでしまうのが人間というものです。

イエスを裏切ったユダはもちろん揺らいだから裏切りました。しかし、志を高く保っているはずのペトロにもイエスは、「私のことを知らないと言うだろう」と予見され、予告されます(「イエスは言われた。『はっきり言っておくが、あなたは、今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう。』」マルコによる福音書 14:30)。ペトロは悔しさも相まって、「死んでも『知らない』とは言いません！」と強がります(「ペトロは力を込めて言い張った。『たとえ、御一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません。』」マルコによる福音書 14:31)。無論、結果は皆様ご存じの通りです(「ペトロは呪いの言葉さえ口にしながら、『あなたがたの言っているそんな人は知らない』と誓い始めた。」マルコによる福音書 14:71)。

揺らがない信仰とは、一体どうすれば手に入るのでしょうか。

族長ヤコブは、兄エサウのところへ帰る際、一人ヤボクの渡しに残りました。その夜、何者かが襲ってきます(「……そのとき、何者かが夜明けまでヤコブと格闘した。」創世記 32:25)。ヤコブはその人と格闘し、圧倒したのですが、腿の関節を打たれて動けなくなってしまいました(「その人はヤコブに勝てないとみて、ヤコブの腿の関節を打ったので、格闘をしているうちに腿の関節がはずれた。」創世記 32:26)。けれども、ヤコブが「祝福してくださるまでは離しません」(創世記 32:27)とがんばったので、その人＝神はヤコブを祝福されました(「その人は言った。『お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ。』」創世記 32:29)。端から見れば、自分の願望に忠実なように見えます。

一方、イエスはペトロの離反を予告された後、ゲツセマネというところで一人、祈り始められました(「一同がゲツセマネという所に来ると、イエスは弟子たちに、『わたしが祈っている間、ここに座っていなさい』と言われた。」マルコによる福音書 14:32)。まもなくイエスは捕らえられ、十字架への道行きが待っています。その緊迫した状況の中でイエスは、「わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように」(マルコによる福音書 14:36)と祈られます。自分中心ではなく、神中心の祈りです。

私たちはつい、前者ではなく後者こそ「揺るがない信仰」だと決めつけてしまってはいないでしょうか。確かに、イエスの姿勢はわかりやすく、神に全てを委ねておられます。しかし、ヤコブもまた、「この神しかいない」「この神に祝福してもらうまでは死んでも離れない」と、全てを神に委ねていると言えないでしょうか。どちらも揺らぐことなくしっかりと神お一人を見つめています。

「揺るぐことなく信仰に踏みとどま」る(コロサイの信徒への手紙 1:23)とは、何か特別なマニュアルがあるわけではありません。「私の救いはここにしかない」と、しっかりと神を、キリストを見つめ、なりふり構わず全てを委ねていくことから始まる姿勢のことを言っているのです。

たとえどのような状況に置かれようとも、特に苦しい状況に置かれたときにこそ、「あなたの光とまことを遣わしてください」(詩編 43:3)と祈ること。また、「なぜうなだれるのか、わたしの魂よ／なぜ呻くのか。神を待ち望め」(詩編 43:5)と、自分と向き合い、神を見つめること。

そのように生きていった足跡を振り返ったとき、「揺るぐことなく信仰に踏みとどま」らせていただけた、と感謝することができるのでしょう。